

「エマオへの道」

イザヤ書7章14節

それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。

ルカによる福音書24章13～35節

24:13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、

24:14 この一切の出来事について話し合っていた。

24:15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。

24:16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

24:17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

24:18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」

24:19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」

24:20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。

24:21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。

24:22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、

24:23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。

24:24 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

24:25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、

24:26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

24:27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

24:28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。

24:29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

24:30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

24:31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

24:32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集

まって、

24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。

24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

①

この会堂 2 階に執務室があります。普段私が仕事をしている部屋です。執務室に入ったことがある方でしたらご存じだと思いますが、机の横の壁のところにカレンダーが貼ってあります。それは川村先生がそのままにしてくださったものですが、そのカレンダーにロベルト・ツントという画家が描いた「エマオへの道」という絵が印刷されてあります。有名な絵ですので知っている方も多いと思います。エマオへ続く道を 3 人並んで歩いていきます。その真ん中は明らかにイエス様。明るい方向を指さして一生懸命にそして楽しそうに何かを話している。隣の二人はイエス様の話を夢中で聞いている。夕暮れのエマオへの道なのですが、イエス様が指さす方向が明るく照らされていて、「こっちだよ」と希望の光の方へ道案内をしてくださるこの絵は、この世の中を生きていく中で明かりが見えなくなり、そんな私たちに共に歩んで下さるイエス様が「こっちだよ。あなたのいく方向はこっちだよ」と明るい方向へ希望の光の方向へ私たちを導いて下さっているかのように思えます。私は執務室で仕事をする時にいつもこの絵に励まされています。

②

そのエマオという村は 19 節によりますとエルサレムから 60 スタディオン離れたところにあります。聖書の巻末に地図がありまして、その 6 番新約時代のパレスチナの地図があります。そこにエルサレムの北西方向にエマオがあります。1 スタディオンが約 185 メートルですので、60 スタディオンは約 11 キロメートルです。11 キロメートルということはこの教会からだ国道 20 号線を道なりにずっと行って岡谷のインターチェンジより少し向うくらいの距離です。車だと 30 分程で行けるでしょうが、歩くと 3 時間近くかかるでしょう。

そんな 3 時間もかかるエマオに向けて出発したのがイエス様が復活したことを女性たちから朝早く聞いたその日の午後のことです。クレオパともう一人の弟子は恐らく住まいがエマオにあって大きな失意の中エルサレムからエマオの家に向かって歩き始めたのです。すると誰かが二人に声を掛けて一緒に歩き始めたのです。その誰かこそ復活されたイエス様、しかし暗く悲しい顔をして会話をしている二人の目は遮られて、イエス様だとわかりませんでした。クレオパともう一人の弟子はイエス様こそがローマ帝国の支配下にあるイスラエルをその支配から解放してくれる政治的指導者として期待していました。しかし、無残にも十字架に掛けて殺され、しかももう 3 日もたっている。彼らにとってイエス様の十字架の死は単なる敗北でしかありませんでした。望みが絶たれて大きな失意と悲しみにある彼らは一緒に歩いて下さる方に不平不満ばかりを話します。

するとそのお方は「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そう言われ、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたりご自分について書かれていることを説明されました。モーセとはモーセについて語るのではなくていわゆるモーセ 5 書、そしてその最初の創世記のことを現わしているのでしょう。つまり創世

記から始まってマラキ書にいたるまで聖書全体、この時代はいわゆる旧約聖書しかありませんから、旧約聖書全体がイエス様ご自身のことについて記されていることを熱く語られたのです。燃える心で明るい方を指さしながら解き明かしをされたのです。約 11 キロ 3 時間の旅です。3 時間ぶっ通しでイエス様はご自身のことを熱く語られたのです。

③

一行が目指すエマオはすぐ近く、クレオパトもう一人の弟子と一緒に旅をし聖書について熱く語るのがイエス様だとまだわかってはいませんでした。ただならぬものを感じていたのか無理に引き留めて家に入りました。食事の席につきイエス様はパンを取り讃美の祈りを唱えてパンを裂いてお渡しになりました。二人はイエス様からパンを受け取ったその時、目が開け、一緒に旅をし一緒に食事をしているのが復活されたイエス様だと気づいたのです。目が開けたとたんにイエス様の姿は見えなくなりました。二人は「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と熱く語り合い、すぐにエルサレムに引き返しました。もう日も暮れているというのに 11 キロ 3 時間かけて夜道を真っ暗な中を、しかし心は燃えた状態で仲間の待つエルサレムへと引き返したのです。そしてユダを除く 11 人がすでに集まっていてお互いにイエス様が復活され自分たちに現れて下さったことを語り合ったのです。

④

重い足悲しみの顔で始まったエマオへの道が、復活されたイエス様が共に歩んで下さり、ご自身について熱く聖書の最初から全体を語って下さった、二人はなお先に行こうとされるイエス様を無理に引き留めて一緒に食事をする事で目が開かれ、イエス様の姿は見えなくなったけれども、軽い足取りで大喜びでエルサレムへの道となった。ここにおいて大切なことはなお先に行こうとされるイエス様を無理に引き留めたことだと言われます。「主よ、共に宿りませ」と讃美歌で歌われる、共に宿り私たちにもっと御言葉を聞かせて下さい、その燃える心が大切な事であると言われます。私ももちろんそのような熱意が大切だと思います。その熱意がなお先に行こうとされるイエス様の心を動かしたのでしょうか。そして共に食事をする恵みを与えて下さったのです。

それにしても思いますのは、「イエスはなお先に行こうとされる様子だった」と 28 節に記されていますが、イエス様はいったいどこに行こうとされたのかということです。もしクレオパたちが無理に引き留めなければイエス様はお一人でどこかに行こうとされたのでしょうか。

「なお先に行こうとする」と訳されている「なお先に」はもとの言葉では「はるか遠くに」「さらに遠くに」という意味があります。夕暮れのエマオへの道で明るい方を指さしながらイエス様ご自身の事を創世記から熱く語られた 11 キロ 3 時間にわたって熱く熱く語られた、その状況で「はるか遠くに」「さらに遠くに」行こうとするイエス様です。私はイエス様が一人で「はるか遠くに」「さらに遠くに」行こうとされたとはどうも思えないのです。これだけの距離と時間をかけて共に歩んで下さり、自分の事がわからない弟子たちにご自身の事を熱く熱く語って下さったイエス様が、まるで二人を見捨てるかのようにお一人で「はるか遠くに」「さらに遠くに」どこか手の届かないところに行こうとされたとはどう考えてもそうは思えないのです。

私はイエス様はこのエマオへの道をととても楽しんでおられたのではないかと思うのです。

イエス様が旧約聖書について創世記から順にご自身の事を熱く語る、語れば語るほど弟子たちの心が熱く燃えてくるのがわかるでしょう。最初は暗い顔をしていたのに心が燃えてどんどん明るい顔になっている、共に歩いて下さるイエス様はそのことを一番ご存じです。イエス様はこの旅をもっと一緒に続けたいと思われたのではないかと思います。創世記から語るイエス様、11キロ3時間の旅で旧約聖書最後のマラキ書まで語りきれませんか。無理でしょう。もっともっと語りたい。エマオで終わりとするのではなくて、エマオを超えて「はるか遠くに」「さらに遠くに」一緒に旅を続けて御言葉の恵みを共に分かち合いたい、イエス様の熱い思いが「なおも先に行こうとされる様子」に見えたのです。だからもし彼らがエマオで引き留めなければ、このイエス様と一緒に旅はさらに続いていたと思うのです。そして、イエス様が聖書の最後まで語り終えたそのところで、イエス様の方から共に食事をする恵みを与えて下さったのでしょう。

⑤

エマオへの道というのはイエス様がいつまでもどこまでも私たちと共に歩いて下さる喜びの道ということです。私たちはこの世の中を歩む中で様々なことに思い悩み苦しみ、まるで夕暮れを一人寂しくトボトボと歩んでいるような思いになります。日が傾き、周りが暗くなっていくように私たちの気持ちも沈んでいってしまうのです。イエス様はそんな私たちにそっと寄り添って下さり「どんなことですか。私に聞かせてください」とまず私たちの悩みに耳を傾けて下さるのです。私たちがたとえそのお方がイエス様だとわからなくても私たちと共に歩いて下さるのです。そして御言葉による恵みを熱く熱く語ってくださるのです。それでも私たちがわからなかったとしても「はるか遠くに」「さらに遠くに」どこまでもいつまでも永遠に私たちと共に歩いて下さるのです。イエス様は私たちの人生という旅の同伴者なのです。明るい方を指さして「こっちだよ」と私たちを希望の光の方へと導いて下さるのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」(ヨハネ 14:6) とイエス様は言われます。イエス様と共に歩む道が真理であり、そして永遠の命に至る道なのです。